なことは何かありますか。

竹中　一番大事なことは迅速な情報提供やと思ってます。以前に消防庁で、障害者への情報提供の在り方を検討した際に、ベルと光を標準にするための委員会を消防庁と一緒に立ち上げ、議論を経て変更しました。

野田　ベルの音は視覚障害者に伝わるけど、聴覚障害者には光と振動を使ってより確実に伝わるということですね。

竹中　NHKにお願いしたいことがあります。緊急時の放送こそ生字幕がほしいんですが、実現していません。技術の進化を生かしてほしいんですが、なかなか進みません。問題の一つに字幕の誤記を心配しすぎていることがあるように思ってます。緊急時こそ少々の誤記・誤字があっても情報を伝えてほしい、という当事者の声に耳を傾けてはどうやと思います。

野田　同じように、Jアラートで「頑丈な建物に避難してください」と呼びかけますが、この「頑丈な建物って何だ」という議論があります。

竹中　それを探しに家から出たりして……(笑)

野田　そういうこともあって今は「頑丈な」は取りましたけど。先ほどの生字幕も同じで、何か基準があってそれに当てはめるという考えでは、大変な瞬間に十分対応できません。これを変えていくために、総務省だけでなく、障害当事者も含め放送局も一緒になった議論で前に進めていくことが大事です。

竹中　あまねく伝えることが一層大事な瞬間ですから、よろしくお願いします。

NHKと同時常時配信に関する問題

――　世界で放送事業が大きく変化しています。スマホなどのデバイスと通信の技術進化で4Kの動画ですら配信できる時代となり、放送電波だけでなく、ネットワークを利用して放送コンテンツを同時に配信したり、見逃しても見ることができるようなサービスが世界で広がってきています。日本では、NHKの同時常時配信が議論されています。これから必要な議論をどう考えていますか。

竹中　NHK経営委員を7年前から3年間やりましたが、その当時からネット配信は話題になっていましたし、ずっと検討してきたテーマだと思います。

野田　20年前の郵政大臣のときには、インターネットが解禁され、これを使って経済活動を応援しようという気運がありました。当時の技術では、動画配信することや、ましてやテレビ放送を同時に配信するなどは、夢のまた夢でした。とはいえ、当時から放送と通信の関係をどう考えていくべきかという議論がありました。20年後の現在、放送とネットの技術はクロスしてきていますが、この課題の結論はまだ出ていません。

竹中　若い層はテレビ受像機を買うよりも、スマホに金をかけるというテレビ離れも進んでいますから、NHKの今後を考える上で大事なポイントです。

野田　大きく2つの課題があると考えています。まず一つは、スマホでテレビ放送を見たいというニーズがあるのかどうか。さらにスマホで見るとしたらどんなコンテンツなのか。長い尺か短い尺かも含めて調べることです。もう一つは、NHKは受信料で経営してきていますが、この同時常時配信をどう位置づけるかです。放送の本来業務なのか、補完業務なのか、についてもはっきりと示すべきことですし、経営のガバナンスの問題もあります。

――　NHKは10月末から「試験的提供B」に取り組んで、テレビを持たない人も含む主にネットを利用する人のニーズ分析を行う計画を発表しています。

野田　もう一度、原点回帰が大事です。視聴者ありきの視点から公共放送の役割は何か。どう果たすのかを深めながら、その上で受信料を議論すべきでしょう。モニタリングした結果、テレビ離れではなく、放送コンテンツ離れならばネット配信をやっても関心が広がりません。NHKの試験的提供Bは必要で重要なモニタリングでしょう。

竹中　この問題の議論は、どっかズレてるように感じています。受信料に含むかどうかより、これからの放送をどう考えていくかという大きな方向性が必要なのに、受信料云々が先に出てくるのはおかしいと思います。

野田　視聴者を代表して言えば、いい番組、興味あるコンテンツならば、それは放送電波だろうがネット回線だろうが構わないのです。そうした視聴者の感覚も含めて議論してもらいたい。

――　予定時間が過ぎていて、次の来客の方が待たれているそうです。もっと対談していただきたいのですが、タイムアップです。お忙しいお二人に時間をいただき感謝です。35年を経て、最新のメディアテーマを女性同士で語っていただけるようになったことを心強く感じています。ありがとうございました。